

マルコによる福音書 10:32～45

「仕えてくださる神」

2025年8月3日(主の日)

藤沢北教会 長倉基

承認欲求という心理学の言葉があります。わたしたちは、誰かに認められたい、と願っているということです。これは自然なことであり、本来は健全なことでもあると思います。小さいこどもに、よくできたね、いてくれてうれしいよ、と行動や存在を認める、受け入れる、承認することが健全な精神の発達に必要なことは誰にでも分かると思います。ところか、この承認欲求はどんどん大きくなってしまふようなのです。おとなになったら人から認められることよりも、もっと大事な視点が必要だとおもうのですが、どうやらそうではない。大人になっても承認欲求が薄れていくどころか、どんどんどんどん大きくなっていく。今、インターネットの SNS で、自分がいかに充実した生活をしているか、レストランでの料理の写真、パーティの写真、旅行の写真を載せるようなことは承認欲求を満たすためだ、という人もいます。あるいは、文章でも、今日こんなことがあったということ載せる、そうすると、すごいね、とか、たいへんだったね、とかコメントがつきます。これも共感してほしい、自分が正しい、そういうことを認めてもらうことを求めている面があるのです。今日の箇所では「偉くなりたい者」という言葉が主イエスによって発せられています。偉い、とはなにも地位だけのことをいうわけではありません。あなたはすごいねと認められることも「偉い」ということになるでしょう。もちろん適切な範囲の承認は必要です。一生懸命やっているのにぜんぜん認められないのでは、やる気もなくなり、自己評価も下がるでしょう。けれども、わたしたち人間はだれもが、この承認欲求、偉くなりたいという思いはエスカレートしていつてしまうのです。前回、お金持ちの人が、財産すべてをほどこしなさい、と言われて、気を落として去っていった姿を見ました。その時ペトロが「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言い出します。ここでは主イエスはこの発言自体がいいともわるいともおっしゃいませんでしたけれど、気をつけなくては、「だから、あの金持ちの人よりわたしたちの方が偉いですよね」となりかねないのが、わたしたち人間ではないでしょうか。

そのことを受けるようにして、今日聞きましたのは、主イエスの12人の弟子のうちの2人、ヤコブとヨハネの兄弟が、主イエスのところに来て、「栄光をお受けになるとき、わたしたちをあなたの右と左にそれぞれ座らせてください」と頼みました。自分たちを一番いい席に、主イエスの両側に座らせてください、と願ったのです。わたしたち兄弟二人が一番弟子ですよね。一番偉いですよね、イエス様、そう認めてくださいますよね、というのです。ここだけ読むと、なんと愚かな、何にもわかってない弟子だ、どうしようもない弟子だ、と思うかもしれませんが、ペトロが言ったように、実際弟子たちは地位も仕事も、家族も捨てて主イエスについてきているのです。地上の富を求めていないのです。弟子たちは権力などというものにも興味はなかったでしょう。だからこそ、主イエスに認

めていただきたい、そういう思いであつたのでしょう。

わたしの父が亡くなった直後に、父が青年時代と一緒に過ごした教会の友人から、私宛に手紙がきました。そこには父のことを「人から褒められることをよしとせず、神の栄光のために教会に仕えた」という一文がありまして、「人から褒められることをよしとしない」とはっきりと言葉できいたのはひさしぶりだな、と思いました。たしかにそうだったのだらうと思います。しかし、認める、ということは適切な範囲で、健全なあり方には必要なことです。牧師であろうと信徒であろうと教会での奉仕を褒めないにしても、認めるようなことを言うてはいけない、となるとそれはちょっとおかしいことになると思います。主に仕えている姿を認める、ということになんらかの形で示すことは健全な教会形成には必要なことでしょう。それを、褒めそやすように言ったり、あるいは自分の謙遜を際立たされるために「あなたは立派ですね。わたしなんてまだまだです」と言ったりするからおかしくなるのであり、受け止める方も、人の誉として受けとらない、人と比べない姿勢が必要です。しかしまた、「わたしは人の誉など受けません」と自分でいい出したらそれも話がおかしくなります。なかなかむずかしいことではあると思います。だからといって、「やって当然だから何も言うてはいけない」という態度もよくないでしょう。たしかに教会の奉仕は主の恵みにお応えしてのことですから、究極的には主だけがわかってくださればいいのです。終わりの日に「よくやった、あなたは忠実な弟子だ」と言ってくださればよいのです。けれども、教会は地上で主の業を担っているものであり、教会はキリストの体ですから、「あなたの奉仕は主への忠実な業だ」と認めることも、教会としてなすべ主の業なのではないでしょうか。礼拝すること、祈ることも含めたあらゆる奉仕を、教会の業として感謝する、一人ひとりの、あるいは全体としての奉仕を覚えて祈る、また長老会議、教会総会で報告する、そういう形で人の誉としてではなく、信仰の行いであることを認めることは必要でしょう。

しかし、ここでのヤコブとヨハネはそういうことではありませんでした。人からではなく主からの誉を望んだようにも見えるかもしれませんが、本当のところはそうではありません。自分たちを認めてほしい、偉いと認めてほしい、という思いからの発言だからです。なによりも、自分たちから求めたのです。

これに対する主イエスのお応えを見る前に、全体を振り返っておきたいと思います。今、一行はエルサレムに上ろうとしています。実は、お金持ちの人がやってきた時に、すでに主イエスはエルサレムへの旅を始めようとなさっていました(17節 「イエスが旅に出ようとされると」)。ここではっきりと、エルサレムに向っておられることがわかります。そして、これは主イエスの強いご意思によるものでした。「イエスは先頭に立って進んで行かれた」(32節)。この先何が起こるのか、弟子たちははっきりとわかっていただけてはいないでしょう。けれども、明らかになんらかの不穏な空気をみな感じ取っていたに違いありません。イエス先生は、ご自分の身に危険があることをわかっておられるはずなのに、先頭に立ってエルサレムに向かっておられる。弟子たちはみなこの主イエスの行動に驚き、

恐れました。そのことを見透かしたように主イエスは12人の弟子たちにこれからご自分の身に起こるであろうこととお語りになります。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する」。自分たちユダヤ人の指導者たちは死刑を宣告し、そして死刑を実行するために、異邦人であるローマ人たち、ポンテオ・ピラトと兵士たちに引き渡す、そして侮辱されて殺される。その後復活する、とおっしゃいました。ここまですでに2度、主イエスの受難・復活予告が記されています。しかし、弟子たちはその意味を理解しませんでした。3度目となるここでも理解していません。だからこれを聞いてなお、ヤコブとヨハネは愚かとも言える願いを主イエスにしたのです。けれども、すでに復活まで経験したとはいえ、わたしたちも、主イエスの死と復活の意味を理解しているといえるのだろうか、と改めて問われる思いがいたします。そこで、この3度目の予告と弟子とのやり取りの中に、重要な言葉が記されています。45節「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」。「人の子」とは主イエスご自身のことです。「多くの人」とはある一部の人を指すのではなく、「すべての人」と言ってよいユダヤにおける表現です。主イエスはすべての人、わたしたちも含むすべての人間の身代金として命を献げるために地上に来られ、とおっしゃるのです。

身代金とは、現代では誘拐犯に人質と交換でわたすお金のことですが、当時はもう少しいろいろな場合がありました。捕虜、奴隷、死刑囚の身柄を引き受けるために渡すお金のことを意味したのです。そういう人たちの自由を買い戻す、と言ってもいいでしょう。そして、身代金によってその人に自由をもたらす行為を「贖い」と言います。身代金を払って人を買戻す、自由にすることを贖いというのです。主イエスは、すべての人を買戻して自由を与えるために身代金としてご自分の命をお支払いになった。今日の言葉は、手紙ではなく福音書には数少ない主イエスの死の意味、十字架の意味を語ってくれる言葉です。それでもなお、わたしたちは簡単には理解できないかもしれません。何から自由にしていただいたのか、だれに身代金を払ったのか、これが自分のこととは、どういうことか。なぜ主イエスは十字架につけられなければならなかったのでしょうか。

一見、あまりつながりのないように見える、主イエスの受難・復活予告と、この二人の弟子の、愚かな願いですけれど、主イエスの十字架の意味を問う、大切な話しになっています。主イエスが、そのように導かれたのです。ヤコブとヨハネの願いは、死の予告を聞いた上で、栄光の座を求める幼稚なものでしたが、主イエスは彼らの願いを頭ごなしに拒否されませんでした。「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっているか」と告げ、「わたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることができるか」と問いかけられたのです。この「杯」とはゲツセマネで主イエスが祈られた時のように、死と苦しみの定めとしての杯を意味します。「洗礼」には様々な意味が込められていますけれど、ここでは明らかに水に沈んで死ぬことを主イエスは考えておられる。杯も洗礼も、死への

定め、そして実際に死ぬことを意味します。「あなたたちはそれを受け入れるか、わたしの右と左に座る、とはわたしと一緒に死ぬことだ」とおっしゃるのです。

それを聞いた二人は、驚くべきことに、「できます」と答えました。単に勇ましいのか、あるいはやっぱりなにもわかっていないのか、はたらかみると呆れてしまうような答えです。彼らは、主イエスが十字架につけられた時に逃げ出してしまう。しかし、主イエスはそこで怒ったりはなさいませんでした。彼らの未熟さ、弱さや失敗をすべてご存知の上で、「確かに、あなたがたは、私が飲む杯を飲み、私が受ける洗礼を受けることになる」と断言されました。しかし、実際に起こったことは・・・主イエスが十字架につけられる前の晩、ゲツセマネの祈りの直後、大勢の人が武器を持って主イエスを捕らえにきました。そうしたら、ヤコブもヨハネも一目散に逃げてしまったのです。そのふたりがもう一度、復活なさった主イエスと出会うわけですが、いったいどの面下げて、というのが正直なところであったと思います。ところがそんなヤコブとヨハネのために、主イエスははっきりと仰せになりました。「確かに、あなたがたは、私が飲む杯を飲み、私が受ける洗礼を受けることになる」。必ず、そうなる。

主のご復活と昇天の後、ヨハネがどうなったかはわかりませんが、ヤコブについては、使徒言行録に記されています。聖霊を受けて使徒たちが教会として歩み始め、このヤコブはエルサレム教会の重要な指導者になったのです。しかし、しばらくして当時の支配者ヘロデ・アグリッパ1世（大王の孫）によって殺されてしまいます。ヤコブは十二使徒の中で最初の殉教になりました。権力者の手によって最初に殺されるということによって、実際ヤコブは主イエスのいちばん近くに席を得ることになったのです。そうして主イエスの杯を飲み、主イエスの洗礼を受けることになりました。主イエスがこの後起こることをすべてご存知だった、という話ではありません。ヤコブなら立派に殉教するだろう、という素質を見抜いたのでもありません。「本当に、愚かで、いっせいはっかりいい弱虫のこの弟子たちを、わたしが選んだのだ。わたしが用いる。神が御心のままに用いてくださるようおささげする」そういうことであつたのだと思うのです。ご自分の弟子として、また教会の使徒として、このふたりをお選びになったのは主イエスであり、そのふたりをお用いになるのも、主イエスの御力にほかならないのです。わたしたちは権力者に実際に殺されるという意味で殉教することは、今のところはないかもしれません。（世が変われば、場所が変わればありえます）。それでもなお、自分は偉いと認められたい。信仰生活が報われたい、そう思ってしまいます。ヤコブやヨハネの話を聞いて、ここまで愚かではない、と思ってしまう。自分の方がわかっている、つまり偉い、と思ってしまうのです。そして、こういうわたしたちのために、主イエスは十字架にかかって、わたしたちを自由にしてくださったのです。そこで、もう一回問わなくてはなりません。偉くなりたい、というのが主イエスが十字架にかからなければならぬほどたいそうなことなのか、と。

そのことの意味を伝えるために、主イエスは十二弟子に向かって言われました。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者とみなされている人々が民を支配し、

偉い人たちが権力を振るっている」。今、世界を見れば、日本を見れば、自分の周りを見れば、そのことがはっきりとわかると思います。そして、自分たちも、権力がほしいとまでは言わなくても、ちょっとした得をするために、支配の側に行きたい、とすら思っている現実があるのです。ヤコブとヨハネがあんな愚かな願いを主イエスに申し出たとき、この人間の正体が、罪の姿があらわにされたのです。偉くなりたいのです。それが、人間の根源的な願いの一つです。そしてそれはおうおうにして暴走します。「わたしの弟子の間ではそうであってはならない、教会はそうではない」。自分たちの教会がそうでなければいいわけではありません。本当はこの世界だって、このままではいけない、と主イエスは考えておられる。「だから、あなたがたが、教会が、この世界を変えるのだ。そのために、わたしがあなたがたを選んだのだ」。

平和を特別に思う8月に入りました。今週来週と様々な記念の日があり、情報も入ってくるでしょう。日本の国の過去の過ちを認めずに、歪めた理解を広めようとする人たちもいます。世界では平気で核兵器を作り、用いることが口に出されます。暴走した偉くなりたい、という思いは、自分からみて偉くない人達を平気で殺すのではないのでしょうか。いったいこの世界が救われることがあるのだろうか。けれども、今日の箇所、そして聖書から知ることは、ヤコブとヨハネは新しくされたということです。全く愚かとしかおもえなかったこの兄弟を、主イエスは命をかけて贖い、教会の土台となさいました。そうであれば、わたしたちも自分自身について望みを持つことができる、主イエスにおいて希望があると思わざるをえません。そして世界についても、人の罪、愚かさよりも、神の救い、神の御力、勝利を信じたいと思うのです。

なお、認めてほしい、褒めてほしい、報われたいと思ってしまうわたしたちです。けれども主イエスは必ず、わたしたちを用い、主イエスと同じところに席を用意してください。それは、すぐ右、すぎ左、偉い人がすわるせきではありません。信じて救われたものが招かれる、主イエスとともに座ることが許された恵みの食卓です。この後の聖餐式によって、その食卓の恵みを味あわせてくださいます。